

お年玉

子どもたちにとってお正月のお年玉は楽しみのひとつ。このお年玉、ほかの家ではいくらあげているのか、またいくら貰っているかは、子どもも大人も昔から気になるようです。今回はお年玉の金額や使い道の移り変わりなどについてみてみましょう。

お年玉の由来

お正月はもともと新しい年神さまを迎える行事でした。門松を立て鏡餅を飾り新しい年を祝います。お年玉の由来は、その年神様に供えたお餅を、家長が年神さまの靈魂の象徴である「年魂（としたま）」として子どもたちに食べさせたことが始まりといわれています。

す。それによって、年神さまからいただいた靈力を皆で分け、1年の無病息災を願ったのです。

お年玉の風習がいつから始まったかははっきりしていません。室町時代からという説もありますが、庶民に根づいたのは江戸時代とされています。家長から家族や奉公人へ、師匠から弟子へなど、目上から目下に物やお金を贈る文化として浸透していったようです。そして現在の子どもにお金をあげる風習へと定着していきました。

昭和の子どもたちのお年玉

ではそのお年玉の金額の変遷をみてみましょう。

昭和ひとけたの世代が子どものころを振り返ったエッセイ(※1)によると、戦前、幼稚園上級から小学校低学年ぐらいの子どもたちは、50銭〜1円くらいのお年玉をポチ袋に入れてもらったそうです。何人かからもらったお年玉で田河水泡の1冊1円の「のらくろ」の漫画本を買うのが楽しみだったと述懐しています。

昭和33年に8歳だったある男性の冬休みの日記(※2)をひもとくと、ハリガネでつぼう(20円)、ガム(10円)、タコ(5円)、おもちゃ(50円)、マリ(5円)と、冬休みに買ったものと値段が列挙されていました。この男性の昭和39年14歳のときの日記には、伯母さ

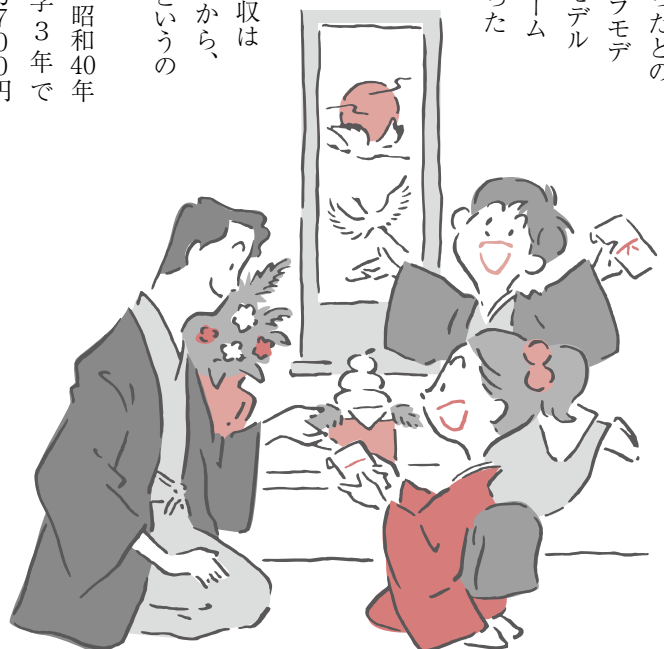
んからお年玉300円を貰ったとの記載があり、また同時にプラモデル(50円)、ラッカー(プラモデルの塗料)(25円)、アイスクリーム(10円)、牛乳(27円)と買ったものが記されていました。

お正月にお年玉でいろいろなものを買って喜んでる様子が想像できますね。昭和39年当時、都会で働くサラリーマン世帯の平均月収は6万円前後だったようですから、中学生に300円のお年玉というのも領けます。

これが高度成長期を過ぎ、昭和40年代の終わり頃には、小学3年で7500円、中学2年で1万7000円のお年玉を平均して貰っていたというアンケート調査があります。その使い道としては約4分の3を貯金に回しており、あれこれ欲しいものを買うよりも、まずはガッチリ貯めこむ子どもたちの姿がうかがえます。お年玉の金額もこのころにはかなり上がり、子どもたちにとっては楽しみなボーナス、大人にとってはちよびり懐が痛む風習になっていったといえるかもしれません。

現代のお年玉

では昭和の末から平成の子どもたちはいくらぐらいお年玉を貰っていて、どんなことに使ってきたのでしょうか。



神奈川県川崎信用金庫が昭和58年から毎年行っているアンケートによると、小学生のお年玉は昭和58年から平成が始まったころまでは大体2万円〜2万3000円前後でした。バブル崩壊後は、減少局面もありましたが、平成9年に2万7469円のピークとなりました。平成25年は前年より微減の2万6035円となっています。

また、お年玉をくれる人数は5.5人(平成25年)。調査をはじめた昭和58年には7.8人でしたから人数は3割ほど減っていますが、一人からもらう金額は2827円から4653円と6割以上増えています。

## ■お年玉の使い道

(複数回答、%)

	平成 25年	
	低学年	高学年
ゲーム機・ゲームソフト	45.6	51.9
本や雑誌・まんが	24.8	28.7
おもちゃ・ぬいぐるみ	18.7	9.3
カードやシール	14.9	8.9
学用品・文房具	12.4	11.0
お菓子・飲み物	12.4	11.4
洋服	9.5	12.7
キャラクターグッズ	8.8	7.6
スポーツ用品	6.1	8.4
アクセサリ・化粧品	5.6	7.6
かばん・ポーチ・靴など	4.3	5.9
プラモデル	3.8	5.1
福袋	2.9	3.8
音楽 CD・ダウンロード	1.6	3.0
携帯電話・スマートフォン	1.1	2.1
電子書籍・タブレット端末・パソコン	0.9	0.8
CD・デジタルオーディオ	0.5	0.8
ブルーレイ・DVD ソフト	0.5	0.4

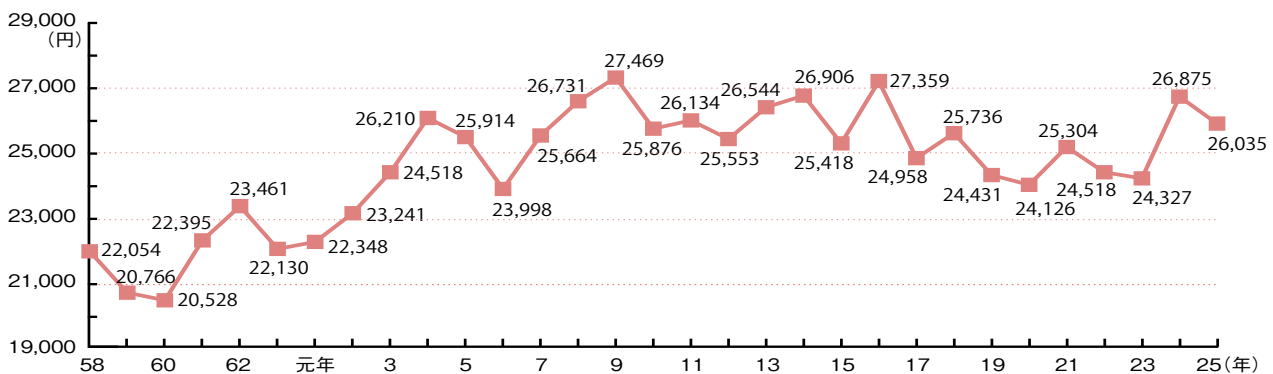
出典：川崎信用金庫「お年玉とお正月調査」平成25年1月より

さてそのお年玉の使い道ですが、大半を貯蓄に回すトレンドは変わらず、平成25年では約2万円を貯蓄に回し、買い物に使う額は約6000円。その使い道はダントツの一位がゲーム機・ゲームソフトで約5割。第2位は本や雑誌・まんが(24・8%)、第3位がおもちゃ・ぬいぐるみ(18・7%)と続きます。2・9%とわずかながら「福袋」という回答もあり、お年玉の使い道は実に多岐にわたっています。

いつの時代も、親がお年玉にかかる費用に頭を悩ますのは同じかもしれません。この記事を読んで「いつそのこと昔のお餅を分け与える風習に戻そう！」なんて思った方もいらっしゃるかもしれませんがね。

※1「昭和ひとけたの東京」川本博康著(芸文社)  
 ※2「昭和史検定」(中央公論新社)  
 参考資料：お年玉のはじまり(ポプラ社)、川崎信用金庫(昭和58、平成25年の「お年玉とお正月調査」、学研サイエンスキッズ(HP)、韓国ジャーナル(HP)、日本海外ツアーオペレーター協会(HP)など

## ■お年玉の平均金額の推移



出典：川崎信用金庫「お年玉とお正月調査」平成25年1月より

## コラム

### お年玉は日本だけのもの？

お年玉の習慣は日本だけのものではありません。欧米ではあまり見かけることはありませんが、アジア諸国では旧正月などに子どもにお金などを与える習慣があります。

たとえば中国では、年始に大人から子どもにお金を与え、その子が無事に育ち、一年を平穏無事に暮らすことを願います。

韓国ではお年玉のことを「セベットン」といいます。姪や甥などの子どもにあげるという習慣は日本と同じですが、少し違うのは子どもにしっかりと挨拶をさせてから渡す点と、ポチ袋に入れず、お金をそのまま、もしくは白い封筒に入れて渡すこと。「セベットン」の「セベ」とは旧正月に行う新年の挨拶のことを指し、韓国では礼を尽くすのが第一であり、挨拶無しで貰えるものではないのです。金額は各家庭

によってさまざまですが、就学前の子どもたちであれば5000ウォン～1万ウォンくらい。円にすると450円～900円くらいでしょうか。

台湾のお年玉は、日本のポチ袋より縦長の「紅包袋」という赤い袋に入っており、大晦日の夜(除夜)に渡すのが慣例となっています。そして興味深いのは、台湾では子どもだけでなく大人もお年玉を貰えること。銀行やレストラン、ショップや観光施設などで、粗品として貰うことができるのです。

その他にも中東の一部でもお年玉に似た風習があるようです。私たちが知らないだけで、日本と同じような風習のある国がまだまだあるかもしれませんね。

